

薫

ing

かおるインク

岡田なおこ



kore de doda!

薫ing

かおるイング

岡田なおこ



岩崎書店

ヤング・アダルト文庫1
薫ing

一九九一年十一月二〇日 第一刷発行

著者 岡田なおこ

発行者 大川松利

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一・九一二 下112

電話 三八一二・九一三一(営業)
三八一三・五五二六(編集)

振替 東京七一九六八二二

印刷 三美印刷株式会社

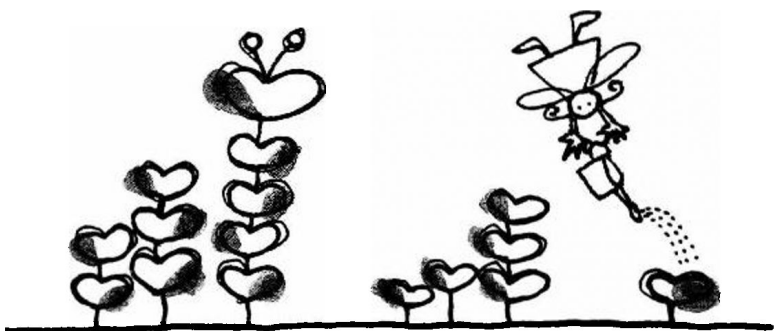
製本 株式会社若林製本工場

NDC 913 落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

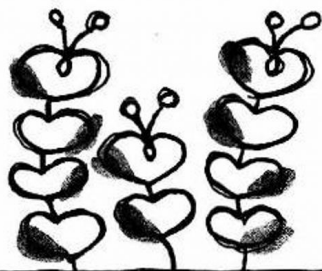
© 1991 Naoko Okada & Yoshie Kuwabara
ISBN 4-265-05201-0
Published by IWASAKI SHOTEN
Printed in Japan

も
く
じ

6	5	4	3	2	1
規格外生徒	お化けたいじ	訪問者	夏の表札	気分はヤジロー	青い風
159	132	99	70	38	7

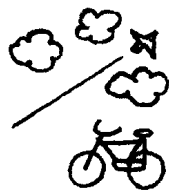


表紙・さし絵
桑原良江



薫か
お
る
i
n
gグ

1 青い風



新学期の緊張がやわらいで、ゴールデンウィークが近づいたせいだろうか。薫^{かおる}はうだうだした気分^{きぶん}でいた。

ヤモリこと森谷^{もりや}の社会科の授業も本格的になり、みんな忙しそうにノートをとっている。薫は授業を録音しているテープレコーダーのカウンターの数字をみつめた。

「おまえはよそ者だからな」

電話のむこうの乾いた声が鼓膜^{こまく}によみがえる。

「普通校に行ったら、もう世界がちがうんだ。障害者^{しょうがいしゃ}同士だからって、なれなれしくすんなよな」

養護^{ようご}学校で九年間、同級だった保彦^{やすひこ}に言われた言葉が、薫の心で渦^{うず}をまく。

A面がおわったテープを裏返そうとした薫の手に、けいれんが起きた。ふるえる手は用のない教科書やファイルにふれ、昼寝していたエンピツが転がりだした。「落ちる！」とあせつたら、こんどは全身がふるえだし、机の上は地震となった。

——こりや、ダーメだ。

薫はテープレコーダーだけ押さえるのがやつとだった。

日ごろ、薫をケアーしてくれるクラスメイトも、ノートをとるのに忙しい授業中やテストの時までは助け船はだしてくれない。一年生から親しくしている辻あやかが、前の席で、「またはでに散らかしたあ。拾ってあげたいけど……」

と言いたげに、チラリとうしろをふりむいた。

——助っ人のいないこういう時、障害とむきあう瞬間だね。

薫があやかにウインクし立ちあがろうとすると、斜めうしろから、大きな影が近づいてきた。

前の時間から机に平伏し眠っていた閑良次だった。良次とは二年の組変えでいっしょになったばかりだ。服装や髪型はどこにもいるツツパリと変わらない。でも彼のけだるそうなしやべり方や、ダーツのような鋭いまなざしを薫は恐ろしく感じていた。

良次は薫の横に便所すわりになった。つめえりがはだけた胸がまぶしい。

——なにをする気だろう？

薫がビビッていると、良次は散らばった物を拾いはじめた。

掃除をサボっているのだから床は汚れている。床に落ちほこりのついた教科書やノートを、彼は一つ一つはたいてから薫の机にのせた。良次が威勢よくはたく。その音で、授業が中断された。

薫は教科書やノートがもどるたびに、「ありがとつ、ありがとつ」とつぶやき、心の中では教壇に立つヤモリに「すみません、すみません」とあやまっていた。

良次が全部拾いおわると、ヤモリが、

「おふたりさん、大掃除はすみましたかい？」
とおどけた。

この「おふたりさん」が薫と良次でなければ、ウケたかもしれない。ヤモリがおどけたとたん、全員の視線がヤモリに飛んだ。

「ひっどーい」

「ふつう言わねえよ」

「サイテー」

.....

教室がざわめいた。

良次がヌーッと立ちあがり、チョーチンアンコウのあくびみたいに、

「バー、カツ」

と言ひ、席にもどつた。

教室のざわめきは治まらない。

ヤモリは平静をよそおい、

「えーつと、ここまで書き写したかな」

声をはりあげた。視線が薫をさけている。

薫のまわりのざわめきが引くと、どこからか回覧メモがまわりはじめた。ふくみ笑い、無言のうなずき、いたずらな目の輝き。怪しげな空気が教室中にただよつた。回覧メモは薫の

前のあやかの所で止まつた。

「なにが、はじまるの？」

薫はあやかのレースのえりに手をかけた。

「か、た、き、う、ち」

あやかは薫の手に自分の手をかさねた。

「どうということ？」

薫^{かおる}が聞き返すまもなく、

ボタン、ガチャン、カンカン、ガラガチャ……。

クラスの数くらいが筆箱^{みずびし}を床に落とした。

——ヤモリへのいやがらせが、わたしの敵打^{かたきうち}ち。

ふだん、口をきいたこともないクラスメイトまでが筆箱を落としていた。薫は、授業妨害のたんなる引きあい^{ひきあい}にされていた。

「なな、なんじゃいヨ！」

ヤモリは薫への遠慮で、どなれなかった。

——ヤモリの思いやりは、どこかはずれている。

薫はいたたまれず、教卓^{きょうたく}から目をそむけた。うしろをむくと、良次^{りょうじ}が馬耳東風^{ばじとうふう}として眠っていた。

ヤモリは授業を早めに切りあげた。

「昼休み、十分もうけたね」

あやかが弁当袋^{べんとうぶくろ}を広げた。

「ちよつと……きょうね、ダイエットの日なんだ」

薫^{かおる}はあやかにうそをついて外にでた。

「おまえはえれえよ、ふつうにやれて。そつちでうまくやつてきやいいさ」

渡り廊下^{ろうか}で風に吹かれていると、また保彦^{やすひこ}の声が聞こえた。

——わかつてないよ。保彦は。

中三で進路をきめる時、薫は普通校を希望した。ひらがなしか読めない子や、おしめをしている子と同じ教室にいるのがいやだったわけではない。ただちがう世界を見たかった。自分をためしたかった。

薫は耳の底に沈^{ちん}溺^{えん}している保彦^{やすひこ}に問いかけた。

——だれだって、見えないモノが見たいじゃない？ 保彦も車椅子^{くるまいす}がそりかえるくらい身をのりだして、窓の外を見てたじゃない！

一月前の春休み、保彦にデートをふられた。

薫はこの一年、保彦にだした手紙を心のファイルにはってみる。

きょうはオリエンテーションです。みんななんて背が高いんでしょう。歩くのが早いでしょう。わたしは整列しているだけでつぶされそうです。

けさ、はじめて「おはよう」って、声をかけてくれた人がいました。うれしかったけど、放課後、下駄箱^{げたばこ}をあけたら、上ばきが鋭利^{えいり}な物で破かれていました。

きょうから授業です。筆記体^{ひっきたい}、養護学校では教えてくれなかったから、黒板の英文が読めない。どうしよう。

中間試験です。日本語で書かれている問題がアラビア語のように思えます。さっぱりわかんないよ。

明日^{あした}から、みんな移動教室に行きます。わたしは四日間、自宅^{じたく}待機^{たいき}。せいぜい英気を養^{やしな}います。

文化祭です。うちの組はバーガーショップをやってます。わたしはすることがなくて、超タイクツ。

メリークリスマス！ クラスコンパがありました。はじめて喫茶店に入ったんだ。みんなは二次会に行ったけど、わたしはまっすぐ家に帰りました。もうちょつと遊びたかったけど……。

三学期はテストばかりよ。数学の計算問題ではじめて平均点をとりました！ 養護学校で百点をとったよりもうれしかった。イエイ。

渡り廊下から見える景色は若葉色。薫の木綿のシャツに風が泳いだ。

——保彦のバカタレ！

渡り廊下と校舎のあいだのガラス戸に、行きかう生徒の影が映る。その中の薫の影だけがゆがんでいる。

——もう保彦の所には帰れない。養護学校にはもどれないんだね。居心地悪くても、ここががんばるしかない。並木高校、二年六組四十七番、戸田薫、やらなきゃならないんだ。

薫は教室にむかつて歩きだした。